

服部浩之准教授

(アートマネジメント/キュレーション)

～共同／協働のプラットフォームを～

建築から現代アートへ

風景を見ることが好きで、大学は建築の設計を学べるところを選びました。学生時代は、六本木や丸の内の再開発が行われていましたが、こういう大規模再開発に直接加担するような仕事はしたくないと思いました。そもそも僕が興味を持っていたのは、建築計画などで意図された部分から外れた隙間や、開発に取り残された余白など、とるにたらない風景だったんです。そんなことを思っているときに、書籍などで知った赤瀬川原平さんや路上観察学会の活動は、とても魅力的に感じました。ユーモアと遊びの感覚を持って、すでにあるものを再発見し、全く別の価値を与えてしまうことに衝撃を受けました。これをきっかけに現代アートに大きな興味を抱き、結果的にアートセンターで学芸員として働くようになりました。

わかりやすさという罠

最初は山口県の秋吉台国際芸術村で働きました。国内外様々なアーティストと新しいプロジェクトを実現することは刺激的でした。県立の公共

施設だったこともあり、とにかく「みんなにわかりやすいプログラムを組みなさい」と言われ続け、「わかりやすさとはなんだろう」という疑問を持ち続けていました。アーティストは、わからないことがあるからこそ、それを他者と共有し探求するメディアとしても作品を創出する側面があるでしょう。ですので、それらの作品は本質的には簡単にわかった気になれるようなものではないと思うんです。その「わからなさ」をみんなと考えることや、それを楽しむ場のほうが公共的な価値があるのではと考えるようになりました。以来、公共性についてずっと考え続けています。

プライベートでパブリックな半公共空間

そんな頃、山口情報芸術センターの同世代の人達と仲良くなり、共同で一軒家を借りて住むことになりました。のちに Maemachi Art Center (MAC)と呼ばれる場所で、アートと都市の関係や諸問題を探求する絶好の場となり、助成金を取ってプロジェクトも行ったりもしました。公共施設

Maemachi Art Center (MAC)、山口県



海外の人々と共同で展覧会を築く

十和田 SURVIVE
展入瀬
展入瀬
展入瀬

十和田奥入瀬芸術祭「SURVIVE—この惑星の、時間旅行へ」十和田市現代美術館、水俣産業所ほか、2013 年

「MEDIA/ART KITCHEN」インドネシア国立美術館、MAPLX パパコック芸術文化センター、国際芸術センター青森ほか 2013-14 年

東南アジアでは美術館インフラの整備が遅れているなどマイナスの面も沢山あるのですが、そんな不足を意に介さず、ないものは自分たちで作ってしまう彼らの態度やマルチな能力には、本当に学ぶことが多かったです。

今年 10 月末までは、あいちトリエンナーレに
キュレーターとして関わってきました。テーマは
「虹のキャラバンサライ〜創造する人間の旅」。
あいちトリエンナーレは、県外から 1 泊 2 日など
で訪れる人も多いのですが、一方で地元で暮らし
ボランティアで関わったり、何度も展覧会やイベ
ントに通うリピーターも多く、実は多様な観客層
がいます。そういう地域の人々が積極的に参加でき

るプラットフォームを築きたいと思い、参加型やプロセススペースのプロジェクトをいくつか展開しました。これらは、展覧会として簡単に成果が見える、わかりやすいものではありませんでした。



しかし、鑑賞するのみの体験に留まってしまうことが多い芸術祭において、より多様な関わりができる余白をつくり、アーティストや観客、スタッフがフラットに交わる解放区を築く試みとしては有効に機能したと思います。

同じように、大学も制度のもとで与えられる場として捉えてしまうと得るものは少ないと思います。より積極的に、この学びの場をハッキングするくらいの感覚で参加してくれる人が一人でも増えるような、オルタナティブなプラットフォームを生み出していきたいと考えています。